Newton

CLASSICS Illustrated®

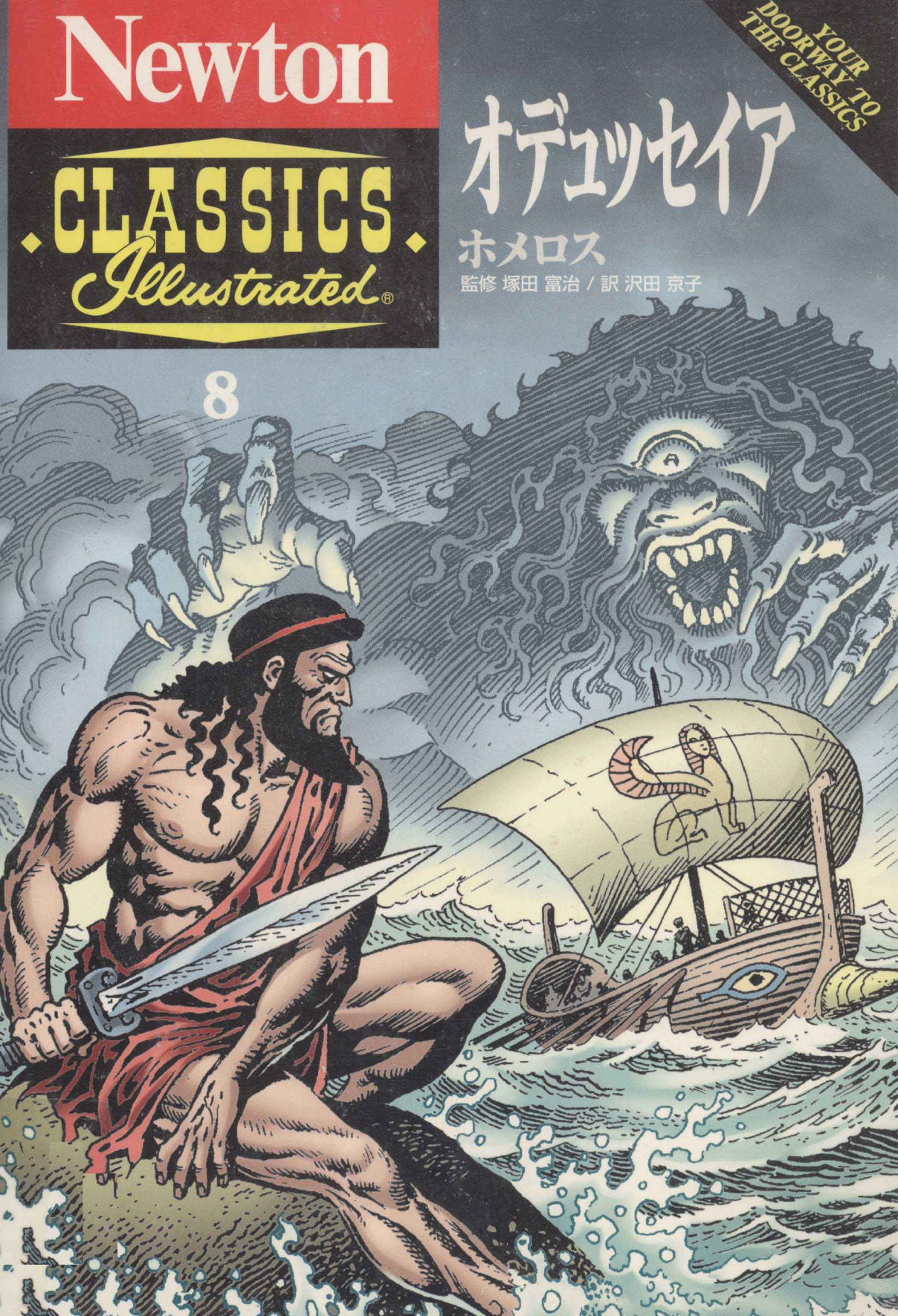
YOUR DOORWAY TO THE CLASSICS

オデュッセイア

ホメロス

監修 塚田 富治 / 訳 沢田 京子

8



監修者
塚田富治
一橋大学言語社会研究所教授。1946年生まれ。早稲田大学政治経済学部卒業。東京都立大学にて法学博士号取得。主な著書に『政治家の誕生』(講談社)、『ベイコン——もうひとつの近代精神』(研究社)、訳書に『マキアヴェッリ』(未来社)。

訳者
沢田京子
翻訳家。1955年生まれ。昭和女子短期大学英文学科およびロンドン大学スクール・オブ・オリエント・アンド・アフリカン・スタディーズ卒業。著書に『イギリス聖地紀行』(トラベル・ジャーナル社)、主な訳書に『ジェーン・エア』(ニュートンプレス)。

Newton Classics 8
オデュッセイア

1997年7月20日　第1刷

原作　ホメロス
監修　塚田富治
翻訳　沢田京子

発行人　辻裕久

発行・販売　株式会社　ニュートン　プレス
〒102　東京都千代田区九段北4-3-14
九段堀江ビル
ご注文・お問い合わせ
電話　0423-95-0538　FAX　0423-95-0587
©1997　Newton Press Inc. (Japanese Edition)
ISBN4-315-51404-7
Printed in Japan

落丁・乱丁本はお取り替えいたします。
定価は表紙に表示してあります。

Newton Classics 8

ホメロス

オデュッセイア

江苏工业学院图书馆
藏书章

Newton Press

Classics Illustrated : The Odyssey
Originally published by Acclaim Books, a division of Acclaim Comics, Inc. in USA.
©Twin Circle Publishing Co., a division of Frawley Enterprises ; licensed to First Classics, Inc.
Classics Illustrated® is a registered trademark of the Frawley Corporation.
All new material and compilation ©1997 by Acclaim Books, Inc.

THE ODYSSEY

今から3000年以上も昔のこと、古代ギリシアの王女がトロイアの王子にさらわれた。怒り狂った彼女の夫は、彼女を救い出すために国じゅうの王子たちを召集した。この不幸なできごとは、10年に及ぶトロイア戦争の始まりとなり、古代トロイアの国を滅亡させることになる。

勝利を得たギリシア側でもっとも偉大な戦士のひとりは、オデュッセウス、またの名をユリシーズという、由緒正しきギリシアの若者だった。戦利品を満載した彼の船団が、ギリシアの沖に浮かぶ島、故国イタケへと帰途についたとき、世にも不思議な冒険が彼らを待っていた。

このオデュッセウスの物語は、今まで語りつづけられたなかで、もっとも偉大でロマンティックな冒険談である。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

トロイア陥落後、オデュッセウスは12隻からなる船団を率いて、
イタケへと向かっていた。

もう戦争はこりごりだ。
わたしは一刻も早く
自分の王国へ帰りたい。

奥方とご子息をなつかしく
お思いでしょう。
ご子息はあなたを覚えて
いらっしゃるでしょうか。

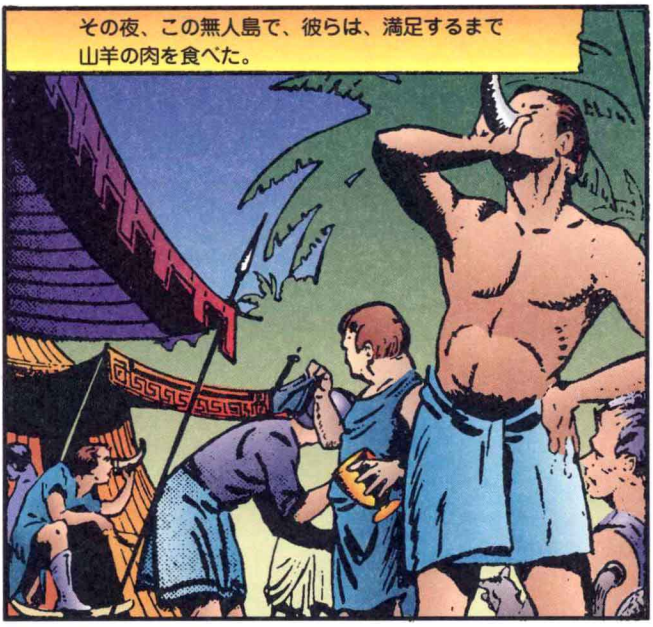
もし運命が寛大でさえあれば、
まもなくわかるだろう。
錨をあげて出発だ！

何日もの航海ののち、イタケの島影が見えてきた。
しかし喜びもつかの間、大嵐が襲い、再び船団を遠くの
海へと押し戻してしまった。

しばらくして船団はキュクロプス、
一つ目の巨人の住む国へと漂着した。

船を停泊させて、
島を探検してくれ。

探検隊は、島でたくさんの野生の山羊を
見つけてしとめた。


その夜、この無人島で、彼らは、満足するまで
山羊の肉を食べた。

翌日。
隊長、向こうの島で
煙が上がっているのが
見えます。

みんな、ここで待っていてくれ！
そこにだれが住んでいるのか、わたしが
自分の船で行って確かめてくる。

オデュッセウスと乗組員は、
その島まで船をこいでいった。
しばらくして、だれかが
住んでいるらしいほら穴を見つけた。

突然、だれかが大声で警告した。
たいへんだ！ 逃げろ！ 怪物が近づいてくる！
急げ！ ほら穴の奥に行くんだ！
オデュッセウスとその部下たちがほら穴の奥深くへかくれると巨大な男が入ってきた。
目は、額の真ん中に一つしかなかった。
彼は、連れてきた羊の群れをほら穴に入れて、入り口を大きな石でしっかりと閉めた。
そして大きな薪を火にくべた。
後ろをふり返ると、火で照らされたほら穴の奥にいるギリシア人たちを見つけた。
おまえたちはだれだ？ 商人か、海賊か？
わたしたちは海賊ではありません。
神の名にかけて、あなたのご加護を乞います。
何も言わずに、キュクロプスは乗組員のうちのふたりをつまみあげると、大量のミルクとともにむさぼり食い、寝てしまった。

オデュッセウスは一晩じゅう考えを巡らせた。

もしわたしがこの怪物を殺したら、入り口をふさいでいる巨大な石をどけることができなくなる。われわれはみな、死んでしまうだろう。

翌朝、巨人は目を覚ますと、さらにふたりの乗組員を食べた。そして再び羊の群れを率いて草原に出ていった。ほら穴の入り口はまた巨大な石でふさがれてしまった。

巨人がいない間、オデュッセウスはどうやって部下たちを助けるか考えていたが、ついにある計画を実行することにした。

あの木の幹を取ってきて、火にかざして固くしてくれ。

それができると…

急げ！丸太をかくすんだ！巨人が帰ってくる！

その夜、怪物はさらにふたりのギリシア人を夕食にした。そこでオデュッセウスは、もってきた強いぶどう酒を巨人にすすめた。

さあ、この酒を飲んで、われわれが船にどんなによい積み荷をもっているかごらんください。

確かにこれは上等な酒だ。おまえの名前は何という？一つ贈りものをしよう。

わたしの名前は「だれでもない」。贈りものとは何です？

それはおまえを
いちばん最後に
食ってやることだ。

それから巨人は泥酔し、
寝こんでしまった。

さあ早く！
丸太を火に
入れるんだ！

オデュッセウスは真っ赤に燃える丸太を
つかんで、火のついた先をキュクロプスの
一つ目につきさした。

殺されたわたしの
部下たちのための
復讐だ。

キュクロプスが身の毛もよだつ大声で悲鳴をあげたので、
近所に住む一つ目の巨人たちが、
何ごとが起きたのかを見に集まってきた。

そんな大きな悲鳴をあげて、
どうした？
だれがおまえさんを
苦しめているのか？

それは
「だれでも
ない」！

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

しかしオデュッセウスを羊にくくりつけてくれる者がいなかった。彼はしかたなく、出ていこうとする最後の羊の腹に自らしがみついた。

最後の羊が近づいてくるのを感じると、キュクロプスは、オデュッセウスを捕まえようとがむしゃらに突進してきた。

キュクロプスが大声を出したので、彼は羊からすべり落ちてしまった。

おまえが言葉を話せて、だれでもない男の行方を教えてくれたらなあ、おれはやつの脳みそをたたきつぶしてやるんだが。

キュクロプスのすぐ目の前で、オデュッセウスは手早く男たちを自由にした。

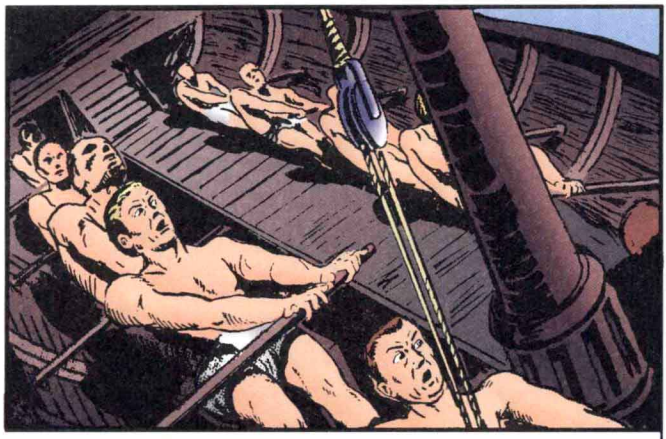
あぶないところだった！

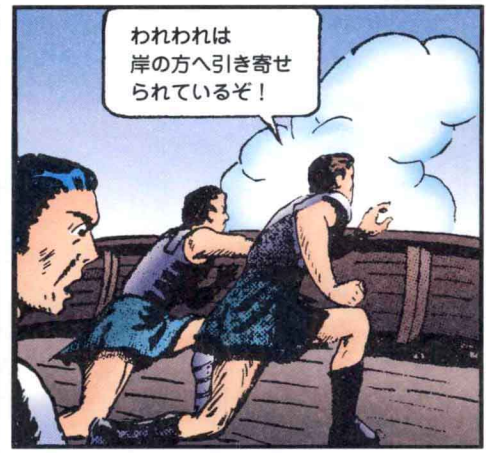
そして、部下たちに船まで大急ぎで戻るようにうながした。

部下のひとりが興奮して叫んだ。

船はもうすぐそこだ！

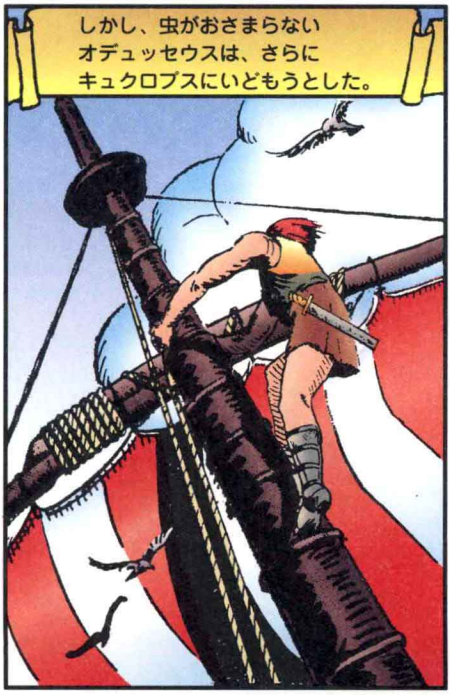
船が岸を離れると、オデュッセウスは、ほかの乗組員たちに何が起こったのかを話した。
一つ目の巨人キュクロプスは、われわれの仲間6人を犠牲にしたのだ。
船が岸から100メートル以上離れたところで、オデュッセウスは巨人に向かって叫んだ。
人食いの怪物よ、よくも部下を食ったな。目を失うことがおまえの報いだ！
怒り狂ったキュクロプスは、巨大な岩をつかんだ。
そして、オデュッセウスの声のする方へ向かって投げつけた。
キュクロプスのねらいは確かで、岩は船のへさきに向かって飛んでいった。




われわれは
岸の方へ引き寄せ
られているぞ！

しかし、オデュッセウスは長い棒を使って船を押し戻した。

だれがやつの目を
つぶしたのか、
巨人に教えてやろう！
もうこれ以上、
やつを怒らせない
ほうがいいです。


しかし、虫がおさまらない
オデュッセウスは、さらに
キュクロプスにいどもうとした。

よく聞け、キュクロプス！
おまえの目をつぶしたのは、
イタケのオデュッセウスだ！

すると、キュクロプスは再び巨大な岩を投げつけた。

今度は岩は届かず、
船尾近くに落ちた。

岩によってできた大波が船を別の海岸へと
押しやった。

オデュッセウスがあとに残してきた
船団が見えた。

旅に疲れ、故郷をなつかしむ乗組員たちは、
オデュッセウスに懇願した。

隊長、どうかわれ
われをすぐ故国に
帰らせてください。

いや、わたしほど、故国や
家族を恋しがっている者は
おらんだろう。さあみんな、
オールを取って進もう。

その後、彼らは風を支配する王の住む浮き島に到着した。
王はオデュッセウスを賓客としてもてなした。

オデュッセウスの話を聞くと、王は快く援助を申し出た。

王よ、われわれは
航海を急いでいるので、
よい風が必要なのです。

では、協力して
さしあげよう。

王は世界じゅうの風を呼び集め、オデュッセウスの
航海を邪魔することのないようにした。

西風以外はみな皮袋に
封じこめてある。
そなたの船の甲板にしっかりと
しばりつけておきなされ。
もし風が逃げ出したら、
そなたは破滅することになる
だろう。

9日の間、優しい西風が吹きつづけ、
やがてイタケの島が海上に姿を現した。
甲板からは崖の上の明かりまで見えるほど
船は島に近づいた。

航海の間じゅう、オデュッセウスは自ら舵を取り、
皮袋から目を離さないでいた。

だが故国が近づいたので
すっかり安心した彼は、
疲れて深い眠りに
落ちてしまった。

乗組員のなかのよからぬ連中にとっては絶好のチャンスだった。

オデュッセウスはあの皮袋の中の宝物を、土産にするつもりなのだ。それなのにわれわれには何の土産もない。

あの袋の中にどのくらいの金銀が入っているのか見ようじゃないか？

いや、だめだ。オデュッセウスが警告したじゃないか。

しかし、男たちはこっそりと皮袋に忍びよった。

そして、ピンとはった表面に刀をつきたて、袋を破ってしまった。

耳もつんざくような大音響とともに風が飛び出した。

あっという間に、大嵐が船をイタケから引き離し、再び風の島へと吹き飛ばした。オデュッセウスの思いがけぬ帰還に王は驚いた。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com